

青山学院ミュージアム開館・『青山学院一五〇年史』完結 記念シンポジウム

「『青山学院一五〇年史』の成果と日本近現代史研究」開催記録

小林 和幸

はじめに

二〇二五年一月一日、青山学院大学青山キャンパス一七号館一七五一〇教室において、シンポジウム「『青山学院一五〇年史』の成果と日本近現代史研究」を開催した。本シンポジウムは、青山学院ミュージアムの二〇二五年五月の開館と『青山学院一五〇年史』（資料編Ⅰ・Ⅱ、通史編Ⅰ・Ⅱ、別冊『写真に見る青山学院一五〇年』）の二〇二五年三月の完結を記念するものであり、青山学院史研究所と青山学院ミュージアムの共催にて企画されたものである。

このシンポジウムは、『青山学院一五〇年史』の編纂経緯や編纂に伴う近代史研究の成果につき青山学院史研究所の所員が報告し、他大学の年史編纂関係者・日本近現代史研究者をコメンテーターとしてお招きし、シンポジウムを通じて、青山学院における年史編纂の日本近現代史研究への貢献や今後の課題を明らかにすることを目的とした。以

下、シンポジウムの概要を記録し報告するものとする。

当日は、シュー土戸ポール文学部教授（青山学院史研究所副所長・青山学院ミュージアム副館長）の開会祈禱の後、三つの報告と、日本近現代史研究者からのコメント、続いて討論が行われた。

最初の報告は、筆者により、「『青山学院一五〇年史』編纂の経緯について―日本近現代史研究の新視点―」と題して行なった。第二報告は、佐藤大悟青山学院史研究所助教による「『青山学院一五〇年史』の成果と課題」であり、第三報告は、日向玲理青山学院史研究所助教による「『青山学院一五〇年史』の成果と可能性」であった。この三つの報告については、本誌に論文として掲載したので、適宜参照されたい。

これらの報告について、四人の日本近現代史研究者によるそれぞれの専門的立場からコメントをいただき、コメン

トへの応答は、佐藤助教、日向助教、筆者が行い、その後フロアからの質問も交えた討論が行われた。以下のその記録を掲載する。なお、フロアからの質疑応答は、一部分の概要を記している。

一 コメント「女子教育の視点から」

差波亜紀子氏（日本女子大学教授）

差波…ご紹介いただきました差波です。現在、日本女子大学文学部に在籍しております。

まずは一五〇年史の刊行を果たされたことについて敬意を表するとともに、お祝いを申し上げます。

さて私は、平塚らいてうなどの戦前日本における高学歴女性にとって、女子高等教育の経験がどのような意味を持ったのかを考えてきたということもあり、女子教育の観点から、コメントさせていただきます。教育経験を検討する際、まずは教育内容がどんなものだったかを確認することが必要ですから、学校の年史は基本資料となります。しかし学生だった者たちにとっての教育経験の意義を考える際には、検討の対象を学生の卒業後、つまり年史の対象からはずれる部分にまで延ばす必要があります。今回、一五〇

年史を読ませていただき、そんな観点から抱いた感想や疑問を、述べさせていただきます。

この一五〇年史では、青山女学院など青山の女子系学校が、アメリカのメソジスト監督教会婦人外国伝道会社が派遣する女性宣教師によって設立されたところから記述されていますが、派遣母体そのものが当時変化しつつあったという指摘にまず興味を惹かれました。南北戦争を契機に、それまでキリスト教信仰に満ちた家庭を守り、教会活動や慈善活動に携わっていた女性たちが、南北戦争で兵士の看護や食事の供給を担うという社会活動することになり、戦後はその経験を活かしてより幅広い社会活動に積極的に参加するようになったそうです。そしてその流れの中で、女性が献金し、女性が組織して、宣教師の妻ではない独身の女性宣教師を海外に派遣する婦人伝道局が次々と結成されていったのです。南北戦争が、ある種の女性の連帯、シスターフッドを促進し、その中に青山の女子系学校もあったということです。広い視野で時代をとらえる中で学校の歴史を描こうとしているという姿勢によるものですが、それを叶えるために、たとえば先ほどの部分では女性宣教師に関する先行研究を参照されており、本文と共に注を読む楽しさを持つ本だと思えます。

次に、叙述の根拠とする史料について申し上げます。国内史料に加えて、学校運営を担った宣教師が派遣元の伝道局にあてた報告書など、在外史料を利用している点に魅力を感じました。報告書の一節を引用することで困難な仕事に取り組む女性宣教師の思いを生き生きと感ずることができました。女子小学校設立を担ったスクーンメーカーの報告書は資料編Ⅰに収められており、資料編へも手が伸びる仕掛けになっていると思います。

さて青山の女子系学校は学校によって学生の年齢も教科も異なりますが、英語や漢学といった教養系、あるいは手芸などそれぞれで高い水準の教育を行っていました。それは科目名や教員、当時の評判など一五〇年史でも紹介されています。奨学金の制度もあり、多様な生徒に門を開いていたのでしょうか。そして「生徒を優秀な学者や有能な宣教師とするだけでなく、有能な主婦、そして良き妻、良き母となる女性らしい女性に育てること」を目的としていました。その卒業生がその後どうしたのか、たいへん興味をひかれます。しかし年史はあくまで学校の歴史ですから、卒業生に関する記述はそれほど多くありません。海岸女学校の最初の卒業生である中山諒さんが卒業後は女性宣教師とともに宣教に従事し結婚するまで日曜学校などで教えたとい

いう例や、校友会の初代会長だった小崎千代さんが牧師の小崎弘道氏と結婚して日本基督教婦人矯風会の設立を助けたといった例が紹介されている程度です。おそらくこれは校友会などの機関紙や卒業生に対するアンケート調査などを利用して、研究されるべき問題だと思っています。そのあたりの資料状況はどうなっているのか、お尋ねしたいと思います。

また卒業生ではありませんが、キリスト教信者のつながりという点で基督教婦人矯風会とのつながりについてはどうだったのかについても、興味を惹かれます。一五〇年史でも女性宣教師研究で参照されていた小檜山ルイさんが矯風会の佐々城豊寿を論じた『明治の「新しい女」』という本がありますが、キリスト教信者のつながりというのは非常に密接であったようですね。

女性の活動は、公職と結びつかないのでなかなか追跡することが難しいけれども、社会の中で無視しえない重要性を持っている、それを検討するために女子大学卒業生の研究は重要だということを、お茶の水女子大学のシンポジウムで加藤厚子さんが指摘しています。それを掘り出すためには聞き取りが重要になりますが、青山学院の場合もその対象になり得る方は多いと思います。今後に期待したいと

思います。

雑駁ですが、以上で私のコメントを終了させていただきます。ありがとうございます。

二 コメント「思想史・宗教史研究の視点から」

山口輝臣氏（東京大学教授）

山口・山口です。よろしくお願いいたします。私は、この『青山学院一五〇年史』のうち、『資料編』Ⅰについて既に意見を公表したことがございます。具体的には『青山学院』第二六九号（二〇一九年一〇月）で、これは私のコメントの抄録みたいになっています。そして、短い書評を『日本歴史』第八六四号（二〇二〇年五月）に書いております。大変良くできた資料集だということに加えて、資料集とは一体誰のためなんだろうみたいなことを問うたものになっています。

いわば『資料編』Ⅰという、戦前の資料には一応一通り目を通しました。一方でこのシンポジウムの準備会がございまして、その時の様子を見ましたら皆さん大体戦前について言及することでした。そこで、新たに勉強しようかと思つて今回は戦後を扱った『通史編』Ⅱを中心に考えてみます。この中でひとときわ厚い、他の二冊分ぐらいあ

るところのうち、実際にはそのうちの第一部なので半分ぐらいになりますが、そこを見ての感想になります。

実は、『日本歴史』の書評で最初こんなふうに書きました。浮ついたところがみじんもない正統派の資料集である。これはその「資料集」という言葉を「通史」というふうに代えてもそのまま通用するんじゃないかと思ひます。すなわち浮ついたところがみじんもない正統派の通史である。つまりオーソドックスでこびない。だけど、高飛車ではなくてそれなりに読みやすい。そして、まず何よりもすごいのは、ちゃんと一五〇周年の年に全部出たということ。これはちょっと驚異的で、これから一五〇年を迎える『東京大学百五十年史』に同じことを期待できるのかどうかというのは大変疑問があるぐらい、それぐらいすごいことだと思います。ですが、オーソドックスで読みやすい分、だからこそいろいろと気付くこともあるのかなと思つて、そのあたり、お話ができたかと思つております。

戦後の青山学院という話になりましたが、戦後の青山学院といった何が特徴なんだろうか。本当はむしろこの『青山学院一五〇年史』の『通史編』Ⅱを読んでそこから把握していくというのが正しい態度なので、皆さんもそれをしてくださいと言ふべきところなんです、一方、今回

のシンポジウムのタイトルは『青山学院一五〇年史』の成果と日本近現代史研究』となっていて、学院の外でどう見られてるのかっていうのを参考にしてもいいのかなと思います。

それで、安易にも年表に何が出てくるんだろうと、『近代日本総合年表』という岩波の厚い年表の索引をちょっと見てみました。そうしたら、青山学院が戦後登場するのは一か所です。一か所が少ないわけじゃなくて、早稲田大学も一か所です。ちなみに、青山学院と違って早稲田大学のほうは不祥事なのですが、これもひょっとしたら人によっては不祥事かもしれませんが。一九七二年一月二日、青山学院、大学・大学院の神学科学生募集停止を決定。これ、言われると年表の項目に載るのもおかしくはないのかなと。学生紛争なんかも関わりつつ、しかも独自性があるっていう点で。この神学科の問題については『通史編』Ⅱの第一部第二章第三節で三二ページにわたって記述されています。

神学科問題というのは何なのかということは、先ほど実は佐藤さんのお話の中でも出てきたんですが、念のために言っておきますと、まず神学っていうのは青山学院とは切っても切れないものでした。ですが、一九四三年三月に神

学部は廃止されます。これは日本基督教団の神学校のほうへと移行し、戦後、東京神学大学へと展開していきます。これとは別個に一九四九年四月に青山学院大学を開学する際に文学部基督教学科ができます。これは一九六一年に神学科と名前を変えて大学院も整備されるんですが、一九七三年度より学生募集を停止してその卒業等をもつて一九七七年に廃止されます。その記述を読んだ印象はバランスがよく取れて、概要がよくつかめるものになっているかと思えます。そこを題材にして、もうちょっと抽象度の高い質問を二つしようかなと思ってます。

一つ目はかつこ付きの「正史」の主語をどうするかという問題で、二つ目は先行する年史をどう理解するか、位置付けるかということです。

ここであいかつこ付きの正史、「正しい歴史」と書く「正史」ですが、今私の意図している使い方としては、ある組織が自らの組織について歴史を叙述するというようなイメージです。『青山学院一五〇年史』も「正史」に含まれます。そうすると、それに対してはもう明確に、少なくとも日本では規範があつて期待されるものが一方である、その期待されるものを念頭に置きながら書く側も書いていくということはどうしてもございます。

例えば、それだけ読んで完結しているとか。新規性をアピールしないと、先ほど佐藤さんの話にも出てきましたが、そうした規範がなんとなく要請される場所があります。正史の場合、主語は普通、大学だったら大学、青山学院の場合は学院、あるいはそのうちの特定の学校の本学という形になるかと思います。ですが、それではどうしても語り切れない事象というのが出てくるはずなんです。学院が何か外部と物事をやっている時には、一般的には学院が主語で問題ない。だけど、例えば内部でいるんなことが起こったとかという時はそれでは難しくなってくる。例えば早稲田大学の騒動なんていうのは大学がという主語では語り切れない話になってくる。

では、そういう時にどう対応するのかというと、アクター、主体を多元化して政治史にするんですね。それで制度史とか行政史を、超えるっていう言い方は政治史のほうが偉いという表現になっちゃうけど、それらとはちよつと違う見方をしていくという形になります。その点で今回の『青山学院一五〇年史』は成功していると思えました。というのは、私がこの事件についての概要を何で知ったかという『青学神学科訴訟』という本なんです。これは訴訟を起こした側の当事者によるいわば糾弾本なので、

大学内部の意思決定っていうのは全く見えてこない。ですが、そのあたりのところも今回の通史は、法人側の内部でもいろいろ意見があったことまで含めてちゃんと記しています。

その結果、糾弾本などでは、なんとなく悪役として出てくる大木金次郎さんですが、通史では、その人も大変重要なんだけど、法人側の中の一人という叙述になっている。なので、いわば青山学院を主たる舞台とする政治史の叙述になっていると思いました。

ですが、大木金次郎さんの発言はなかなか面白くて、「クリスト教主義という建学の精神の特種な伝統を護持してゆく」というのが学長就任時の発言で、学生集会の時には「本学の建学の精神であるクリスト教の精神と、唯物弁証法的世界観に立つマルクス主義及びその延長上にある全学連的学生運動とは、本質的に両立しない」と発言しています。その後も、「本学はクリスト教主義大学としての特殊な学園であります、その特殊な宗教的な学園の性格が、少数の教師や学生たちによつては必ずしも妥当に理解されてはいなかったようであります」、「世評によれば青山学院大学は「クリスト教の解放区」となっている……これほど青山学院にとって屈辱的なことはない」というような

ことを言ったりしています。こうした大木さんの発言なんかを考えると、この事件、例えば世俗化と経営という形だけでは説明できませんね。世俗化に合うような現象もあつたりするんです。役職者のクリスチャン条項の削除なんていう議論はこの時期並行して行われるので、いわゆる世俗化も進み、神学科が経営的に寄与しなかったことも確かなんです、それだけではどうも説明できない。このあたりを、どうするのかという問題があります。

それとの関係で気になるのが、先行する年史をどう位置付けるかという点です。例えば、今回の通史の前に『青山学院大学五十年史』というのが出ております。その中にちゃんと神学科の節が設けられています。二八ページぐらいあるのかな。これにいわば準拠するような形で今回の記述がなされています。というのは、中身というよりも節の分け方で、簡単に言うと学生紛争とは別個に一つの節を設けている。これは大変分かりやすいし、形式として正しいかなと思うんですが、だけど、大学紛争との関係がやはり見えにくくなっちゃってるかなというのと、逆に『青山学院大学五十年史』を読んだ上で今回の通史を読むと、もうちょつとその先を期待してしまうというのがどうしてもございいます。例えば先ほどの課題としても出てきたんです

が、紛争とも絡みつつ、独自性を有すると思われる日本基督教団の分裂の問題ですね。社会派と教会派と言われたりしますが、そうしたもののとの関連を垣間見ることはぼつぼつとできます。つまり大学内の神学科のほうでも少し割れてるんです。ですが、そうしたことに關して明確な記述が今回はないと。

また、そもそも東京神学大学の学生の編入学が大きな問題になっていたことから分かるように、より大きな紛争は東京神学大学でなされていて、学生が半分ぐらい退学させられるということが起きます。そして関東学院大学、これも青山学院と大変深い関係がある大学ですが、ここでは神学部が廃止されます。「なお、一九七三年には関東学院大学神学部も大学紛争のなかで廃止されていた」って記述が通史にはちゃんと一行あるんですが、逆に言う一行しかないんでそれとの連関が特に書かれていない。ですが、それって年史の仕事なのかってというのは考えてもいいのかもしれない。それは年史の仕事じゃなくて、それを読んだ研究者が、それでインスパイアされた研究者がすべき仕事なのかもしれない。

あれこれ考えてくると二つ質問があるかなと思います。一つ目は正史の主語をどうするのかということです。政治

史的な叙述が進めば進むほど主体が複数になってきて、その場合、大学で行われている政治史という形、あるいは大学を一つの舞台とする政治史という形になっていく場合、どうすべきかというのを答える必要はなく、叙述に当たってそのあたり今回気を付けてみたかどうか、あるいはそのあたり何か気になったことはありますかというのをお三方への質問になります。お三方全員答える必要はなく、どなたかに答えていただければと思います。

もう一つは、先行する年史との距離の取り方みたいなものですね。どう扱うべきなのか、そもそも先行研究なのか。それはどうすべきかという答えじゃなくて、今回はどうしたのかというのを聞いてみたいなど。それは『東京大学百年史』という、とんでもないでかいものがある、その後の『東京大学百五十年史』を分担している私にとって全く他人ごとではないのでどうしてもそのあたりを聞いてみたい。逆に言うと、その点に関しては今日のシンポジウムは大変意義があるものだったのかなと。今までのものと比べてこういう成果があつて、これが課題であるということとを共有して、その可能性を示していこうという意味でなかなか興味深いシンポジウムだったのかなと。まだ終わってませんが、今後楽しみだなと思っています。山口

からは以上になります。

三 コメント「大学史編纂の視点から」

真辺将之氏（早稲田大学教授・早稲田大学歴史館館長）
真辺・真辺と申します。私は早稲田大学歴史館で館長としております。歴史館というのは何かと申しますと、青山学院の場合にはミュージアムと学院史研究所がそれぞれ別組織になっているという話が先ほどありました。これが一つになっているような感じですが。早稲田大学の場合は、もともとは同じように、展示施設としての歴史館とアーカイブズとしての大学史資料センターとに分かれていたのですが、それが三年前に一つになりました。ですので、その統合された歴史館で、現在、『早稲田大学百五十年史』を編纂し、またアーカイブズ事業を行い、そして校史に関する展示を行ったり、あるいは自校史教育を行ったりという形で、複数の機能を果たしていることになりました。

今日は大学史編纂の立場からということですので、『早稲田大学百五十年史』との比較において『青山学院一五〇年史』を検討してみたいと思います。今回のシンポジウムのタイトルが『青山学院一五〇年史』の成果と日本近現代史研究』となっておりまして、その日本近現代史研究

と、そこにどう貢献するか、どこにどうつなげていくかということを、かなり強く意識されていると感じました。

早稲田大学の場合も、もちろん近現代史の中で大学の歴史を位置付けるということは念頭に置いているわけですが、ただ現実にはそれがどれだけ近現代史研究として貢献できるものかどうかというところは、いくつか補足すべき点があります。これは、ただ単に『早稲田大学百五十年史』の志が低いとか、そういうことではなく、『青山学院一五〇年史』と『早稲田大学百五十年史』では、かなり性格の異なる点があると思います。

それは何かと申しますと、青山学院の場合には、先ほどお話のあった『青山学院九十年史』をはじめとして過去にいくつか年史があるとはいえ、それぞれ単巻構成といえますか、一巻だけのものであるわけです。分量的には、今回出された『青山学院一五〇年史』が一番詳しい大部なものであるとかがっています。今回、資料編から始めて資料編を二巻と通史編を二巻ということで、短期間で年史を作るといえるのは本当に大変なので、よくできたというふうな、皆様のご尽力に感謝するのですけれども、早稲田の場合には『早稲田大学百五十年史』の前に『早稲田大学百年史』というのがありまして、それは全八巻構成のものなの

です。それに対して『早稲田大学百五十年史』はかなり少ない三巻構成であるわけです。これはどういうことかというところ、『早稲田大学百五十年史』をそもそもなぜ作るかというところに関わってまして、『早稲田大学百年史』の中で書けなかったところがある、ということからスタートしているわけです。

それは具体的には何かというと、戦後の学生運動、あるいは不祥事の問題ですね。この部分が『早稲田大学百年史』の中では意図的に避けられているところがありまして、これを埋める必要があるのではないかと、いうところが出発点になっています。百五十年という区切りが果たして適切かどうかという議論も当初はあったんですけども、二百年まで待った場合に機構がかなり複雑化していく中で、ここですっきりとまとめておかないと、二百年の時にはもう資料が残っていないし、何も分からないという状態になるのではないかとという危惧もありました。そこで百五十年で一区切りとして、二百年史につなぐ意味でも作っておいたほうがいいだろう、ということになっているわけです。

ですので、第一巻は戦前の部分に当てていますが、これは『早稲田大学百年史』でかなりの量が記述されていますので、基本的にはそれを圧縮する形になります。もちろん

歴史の見方としてかなり変えている部分もあるので、そこはぜひ読んでいただければと思うんですが、とはいえ、全体として見るとやはり圧縮という色彩が強いわけです。

それに対して第二巻、第三巻が、百五十年史の目玉になってきます。そこで戦後の大学の歴史を扱うわけですが、これも、ここが百五十年史のメインであるということです。これが、先ほどの近現代史研究とどう関わるのかということと、なかなか難しい部分がある、というところなんです。これは、さきほど山口先生がおっしゃった、つまり戦後の年表の中で早稲田大学が一個しか出てこない問題と関わりますが、そういうふうには歴史のなかで大学の持つプレゼンスというのは確実に下がっているという事情がある。一つの大学だけが歴史の中で果たしている役割というのは、それほど大きなものではなくなっていく、ということと、ころがありまして、そこが、全面的に戦前から新しく歴史をつくろうとしている『青山学院一五〇年史』と、早稲田の戦後を中心とする『早稲田大学百五十年史』の違いだと考えています。その違いが、近現代史とどうつながるかという点で難しい部分でもある、というふうに捉えています。

また学生運動をどう書くかということも問題です。学生運動のことを年史の中で書くとはいえ、それは大学側の見

解が中心にならざるを得ないわけです。当然、学生運動に関わっていた当事者からすれば、それは納得がいかない。あるいは大学の中でもさまざまな意見がありますので、必ずしも当局の意見に賛同する人ばかりではないわけですから、何を書いたところで恐らく批判は絶対に出てくるだろうと予想されます。そういう意味での難しさが一つあります。加えて、学生運動と考えた時に、例えば早稲田の場合には学費・学館闘争という、学費値上げとか学生会館の運営を巡る闘争がありまして、これは大学マターなんですよね。大学の歴史として書く意味があるんですけども、それ以外に例えば安保闘争などでは、これは一つの大学を超える動きであるわけですね。あるいはセクトの問題なども出てきますが、これになると、例えば早稲田の大学構内で暴れている学生が早稲田の学生かという、そうではない人が結構いたりとか、あるいは早稲田の学生が外で、他の大学で暴れたり、そういうことが起きるわけで、大学はあくまで一つの「場」ととらえることになります。そうすると、それは学生運動史として研究することには意味があるかもしれないけど、早稲田大学史としてどこまで書けるかという点では、なかなか難しいことがあるわけです。

もう一つは、大学の機構が複雑化し、学問が細分化して

くることの問題です。例えば、大学を生み出した学術的成果を年史の中に組み込もうとする場合、年史編纂で関わる人は歴史研究者であり、あるいは教育学の研究者であったりするわけですが、理系の学問の評価は歴史研究者には難しいわけですね。では、早稲田でいえば理工学部の人にそれをお願いする、といったところで、今の学問には興味があっても過去のことまで把握している人というのはなかなかいない。仮にいたとしても、いるところになんて頼めば、それはバランスが悪いということになってしまうわけです。

ですから、もともと早稲田大学では、百五十年史は二百年史を見据えたうえで、その中間ということで計画したわけですが、やっていく中で疑問として生じてきたのは、これだけ価値観が多様化し、また学問も機構も複雑化していくなかで、果たして五〇年後に『二百年史』を編纂するということが可能なのだろうか、ということなのです。そう考えると、あくまで私個人の中ではありますが、大学史を学校で出すことよりも、アーカイブを整えて研究者に資料を提供していくという、そちらの機能のほうがより重要性が高まってくるとは思いません。あるいは学生運動の研究者、あるいは特定の学問分野の歴史を研究している人に対して資料を開いていくということです。これ

が重要な業務になってくるのではないかな、というふうにも思うわけです。

アーカイブズということで言うと、各大学が、年史編纂から始まってアーカイブズを設置して、という流れになってきているわけですが、ただ国立大学は公文書管理法の影響で、かなり文書の移管の規程なども整えられている大学が増えてます。けれども、私立大学では、まだ十分には進んでいないわけです。学習院大学みたいにそういう規程を作った大学もあるのですが、基本的には私立大学ではそうした文書サイクルはできていない。早稲田大学の場合にも文書の移管の規定はないわけで、基本的には自発的にその部局が移管を申し出てくるか、あるいは個人の教員の寄贈資料に依拠する、というような形にならざるを得ないというのが現状となっています。

青山学院の場合は、今回、資料集の編纂からはじめて、かなり資料を精査されて編纂されたと思うのですけれども、ネットにも出ている青山学院の中期計画などを拝見したところ、一五〇年史編纂とともに「学院史資料・文化財の活用と公開」を図っていくというようなことが書かれておりました。そういう意味で、この『青山学院一五〇年史』の編纂を、その後アーカイブズのほうにどうつなげて

いくのか、ということをごのようにならていらつしやるか。後で討論の時にでも時間があれば、お答えいただければありがたく思っています。

もう一つ、やはり年史編纂の波及するところでは、ミュージアムとか校史の展示ということが課題になつてきます。ミュージアムでの青山学院の歴史展示を見ていると、歴史の通史にかなりこだわつておられて、戦前の学院の通史がよく分かるように構成されていると感ずります。写真資料なども多く使つていて、これが早稲田とかなり違ひます。

早稲田大学歴史館の場合には創設期は結構詳しく展示されているのですが、ただ、人物中心になつてるところもあつて、学校の通史という部分が非常に弱いという問題点があります。補足しますと、昔は歴史館と大学史資料センターが別だったということを言ひましたけれども、当初、大学史資料センターの担当者が考へた展示案が学校側にはとんど却下されたという経緯がありまして、基本的には大学としては歴史館を広報機関として位置付けたという経緯があります。つまり、歴史研究の場としてではなくて、あるいはそれを一般に示す場ではなくて、大学の広報として位置付けるということがあつて、それが当時の大学史資

料センター側とは見解が異なつていたので。当時、私は直接そのことに関わつてなかつたので詳しいことは知らないのですけれども、そういう経緯があつて今のようになつていふという事情があります。

ただ、現在では、歴史館が一つに統合されたということもありますので、今年の後半、展示を一部リニューアルしようという計画はあります。ただ、それでも学校の求めるもの、あるいは卒業生の求めるものは、必ずしも歴史を求めているわけではなかつたりもします。つまり、よくある声としては歴史館に来て、「私がいた時代の写真がないじゃないか」とか「懐かしめないよ、これじゃあ」といった意見が多いわけですね。つまり、今、OB・OGの人たちが来て懐かしんで、「この時代、この建物あつたね」、「この店、あつたね」みたいな、そういうことが一番来る人にとっては重要だつたりもします。つまり、年史編纂は誰のためのものか。あるいは、それに付随して生まれる展示というものが、どういう目的のために、誰のためにあるのかというの、なかなか難しい問題がいろいろあると思うのです。

そのあたりも、ミュージアムが開かれたということ、歴史に詳しい人や歴史家の私からすると本当にうらやまし

い展示だなと思います。青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」に基づいていて、そうしたコンセプトで光をモットーにして構成されている。しかも、小さな光がいっぱいあるのと同じように、早稲田だと大隈重信とか、大隈を支えた「四尊」といわれる、坪内逍遙だとか高田早苗とか、そういう四人の人がいるんですけど、そこにどうしてもスポットを当てちゃうのですが、青山学院の展示ではもうたくさんの人が入っていて、それぞれが小さな光として学校の年史を形づくっているというのがうかがえる展示になっていると思うんです。

そういう意味で歴史家から見ると非常にいい展示だなというふうに思ったんですけども、そのあたり、まだ開館して間もないので反応がどれだけあるかちょっと分からないんですが、見た方からの反応とか、それを踏まえて今後の企画展などをどういうふうに考えていらっしゃるのかな、というあたりも、もし後で時間があれば伺えればと思います。以上です。

四 コメント「政治思想史・宗教史研究の視点から」

小川原正道氏（慶應義塾大学教授）

小川原…慶應義塾大学の小川原と申します。私は政治思想

史研究の視点からということで、この場と呼ばれたのは、本多庸一を含めたクリスチャン政治家の研究をしてきたこと、戦前の国家と宗教、特にキリスト教との関係を研究してきたこと、といった理由からだと思います。その観点から、いくつかコメントと質問をさせていただきたいと思っています。

まずは今、真辺先生から『早稲田大学百五十年史』のお話がありましたが、慶應義塾におきましては、学校の規模が大き過ぎ、資料が揃っていないといった理由から、早い段階で一五〇年史の通史編を編むことを断念しております。その意味で、青山学院が創立一五〇周年に合わせて一五〇年史の通史編を刊行されたことに驚愕しつつ、深い敬意を表したいと思います。私は、主に戦前の研究をしておりますので、『通史編』Iを中心に拝読し、勉強になった点、さらにこういったことも教えていただければ、ということについて、今日のご発表を踏まえつつ、いくつか申し上げたいと思います。

一つ目は、本多庸一の思想と学院内での影響力についてです。『通史編』Iで、本多の生涯の目的を表す松島剛宛の書簡が紹介されており、校長として取り組んだ実績もいろいろと挙げられています。また、内村鑑三不敬事件を受

けて東京英和学校が批判にさらされる中で、本多が教育勅語の奉読式を実施し、「基督教徳育の拡張は即勅旨に報し奉るべき臣民の一大急務」と主張したという形で本多の思想が紹介され、非常に本多的な特徴が読み取れる記述になっております。この後、本多は、武士道とキリスト教の共通性や、武士道精神は万世一系の君臣政体に立脚するといったことを言っていくわけですが、この本多の思想的特徴のようなものが、青山学院ないしは東京英和学校の中でどの程度の影響力を持つており、宣教師との関係でどういった対立、あるいは親和性を生んでいったのか、そういったことについて教えていただければと思います。

といいますのも、この少し後に同志社では綱領削除事件が起きております。社長の横井時雄が徴兵猶予の特典を獲得するために綱領の一部を削除し、神学校以外でキリスト教教育をしないという方針を取って特典を得るわけですが、結局宣教師などから反発を受けて辞任を余儀なくされるという事件です。そうした意味では、教育勅語とキリスト教教育との親和性を打ち出した本多が校長の立場を追われることはなかったというのは、青山学院の一つの特徴のように思われますが、そのあたりの経緯や背景を教えてください。

それと関連して、『通史編』Iの続きのところでは、文部省訓令第一二号が取り上げられております。今日の佐藤さんの報告にもありましたが、一八九九年に出されたこの訓令は宗教教育一般を制限するもので、『通史編』Iでも宣教師や他校と連携してこれに対抗し、文部省と交渉して譲歩を引き出した経緯が書かれています。

これに関しては、あまり新知見がなく、資料もないといったお話が先ほど佐藤さんからありましたが、二年前に刊行された『立教学院百五十年史』第一巻を見ますと、本多も含めた日本人指導者には危機感が薄く、それに対して宣教師のウイリアム・インブリーが公認学校とされることはキリスト教精神の犠牲を生む、と主張したとされています。各校の対応は割れ、本多は、最上級生は年末まで訓令に従うよう指示を出した、とのこと。やはり『立教学院百五十年史』によると、宣教師側がキリスト教教育の維持を主張し、日本側の理事、恐らくは本多も含むのでしょうが、彼らがこれに難色を示したところ、宣教師らが予算を取り消す方針を示唆したため、主張が通り、政府の認可を返上してキリスト教教育が継続された、という経緯のようです。

『青山学院一五〇年史』の『資料編』Iに、一八九九年

の一月九日付のChristian Advocateというメソジスト監督教会機関紙の論説が掲載されておりまして、これを読みますと、文部省を厳しく批判しております。反キリスト教主義を取っていて若者の視野を狭め、過剰な国家主義を助長し、その手をキリスト教学校まで伸ばしてきている、といった主張で、先ほどの本多の立場とは相当距離があるように感じられます。本多の立場とは距離がある、このメソジスト監督教会の主張が学院としての方針になるわけですが、そのプロセスがどういうものであったのか、また、ある種の「賞味期限」というか、宣教師側の意向が学院の思想として採用される期間はいつまでだったのかということをも、もしお分かりでしたら教えていただきたいと思っています。

実際、もう少し時代が後になってきますと、国家側に押し切られるという構図が、各キリスト教学校で展開されていくこととなります。『青山学院一五〇年史』の『通史編』Iでも、一九三五年に訓令第一二号に関して文部省が、教育勅語による教育を重視するよう通牒を出し、青山学院は勅語の趣旨に基づく旨を各学部学則に記載しつつ、キリスト教教育・信仰の維持に尽力したとして、いくつか事例が挙げられております。このバランスを取るの是非常に難し

い問題でありまして、この過程では、学内にさまざまな葛藤や模索があったように思います。同時代において、例えば上智大学の学生が靖国神社への参拝を拒否したのに対し、軍部が反発して結局参拝を受け入れた事件が一九三二年に起きており、同志社では柔剣道場に神棚を設置したところ、これに反発する声があがり、その撤去に軍が反発して結局受け入れた、という事件が一九三五年に発生します。立教学院においては慰霊祭を一九四二年までキリスト教式で執行していたところ、一九四三年からは神道式で行うことになる。神社、神棚、神道を軍の圧力の下に容認していかざるを得ず、そうしないと学校が維持できないという問題があったわけです。このあたりの問題を、青山学院はどう解消していったのか、解消し切れなかったのか、ということについて、もし何か象徴的な事件などあれば、教えていただきたいと思います。

関連する項目として、『通史編』IIの冒頭で、「戦時下における苦難の象徴」として、一九四二年の寄附行為変更が挙げられております。寄附行為にあった、キリスト教主義、メソジスト教会の信条に基づく教育という方針が、教育勅語を奉戴し、皇国に貢献する人材をキリスト教精神によって陶冶する、と変えられたという問題です。これが

ったことなどを考慮すると、非連続性を読み取ることでもできるのかもしれない。そういう大きな意味での、「青山学院の思想水脈」のようなものを、われわれはどのように認識すべきか、ということについて、もしお分かりでしたら教えてください。と思います。

ただ、こういう問いを私が発すること自体、あるいは、『青山学院一五〇年史』という最新の年史にとつては、過去のもののなのかもしれません。つまり、教育勅語をはじめとする大日本帝国の内面に対する征服に対して抵抗する、それに抵抗しきれずに受容する、それを自己批判する、といったミッシェンスクール史のある種の定型的な「語り」から脱却する、という編集方針も当然あり得ると思います。こういう問いを発すること自体、私は過去の人なのかもしれない。何かそれと関連する編集方針等があれば教えていただければ幸いです。私からは以上です。

小林…コメントをありがとうございます。四人の先生方からの貴重なコメントを頂きまして、『通史編』につきまして好評の上でのご質問だったと思いますので、ほっとしております。

それでは、差波先生からのコメントについて佐藤さんと日向さんからお答えいただければと思います。

佐藤…早速、コメントへの応答ということでお話しいたします。青山学院や青山女学院はメソジスト監督教会の宣教師によって作られた学校ですが、メソジスト監督教会の人々は禁酒を特に戦前はよく守っており、禁酒には娼娼問題のような様々な問題が関連しているため、宣教師や学院の出身者たちが禁酒運動や娼娼運動で盛んに活動するという状況がございました。やはり学校の年史にとっては外縁にあたるので、なかなか触れにくいのですが、今回ご指摘いただいた小崎千代や佐々城豊寿らのように、年史にはちよつとしか出てこないものの、実際には学校外の領域で活躍している人物がたくさん目につきました。このあたりはまさしく日本近現代史研究の課題といえますが、年史が出たことによって従来注目されてこなかった領域、もちろん娼娼会なんかは注目されてきましたけれども、もつこの領域や人物について注目すべきだと光があたることで、今後の研究の発展につながればよいなと思っております。娼娼会については青山女学院にも文学会のような組織の一つとして娼娼会が置かれていて、さらにその出身者が後に娼

風会に入り、社会運動を繰り広げていくこともありました。いただいたコメントをもとに、学校の理念が生徒にどのような影響を与え、生徒が卒業後にどういった活動を行ったのかについては、今後研究を進めて紀要等に発表していきたいと考えています。

日向…日向でございます。卒業生の状況が分かる資料ということですが、十分に分かる資料というのは限られていまして、先ほどの報告でも引用しましたけれども、青山女学院の『青山女学院校友会会報』というのが基本的な資料になっておりまして、この中に卒業生たちのその後の様子が記されています。家庭に入る人、職を得て仕事に従事する人、学校教員になる人、アメリカなどに留学する人たちもいます。今回は松岡久子という人を取り上げましたけれども、多様な生き方があるということがわかりますし、今後はそうした情報を詳細に読み取っていく必要がありますと思います。それと同時に、今回の年史編纂にあたっては学内資料によったところが非常に多かったのですけれども、同時代に刊行された雑誌類に青山学院、青山女学院の関係者が出てくるかどうかということを調査していく必要があると思います。そういった資料を収集していくとい

うことで校友や学院関係者の活動の実態みたいなどころが見えてくるかと思っています。

小林…少し補足しますと、女子系学校に関する資料につきましては、女子専門部の戦中戦後を過ごした方からの聞き取りというのを行いまして、これは『青山学院一五〇年史編纂報告』第四号に戦中戦後の女子教育についてのお話を掲載しており、非常に有益でした。近年、この時期についてお聞きできる機会が少なくなってきたており、われわれも鋭意、聞き取りを含めて個人史料の調査や収集をしていきたいと思っています。

小林…続きまして、山口先生からのご質問と貴重なご指摘をいただきました。山口先生には、コメントのなかでも言及していただきましたが、『資料編』Ⅰの刊行の際に、資料集刊行の意義について、大変好意的な評価をいただき、それを書評でも取り上げていただきました。感謝しております。また、今回のコメントでは、『通史編』Ⅱの方について、大学の年史とは何かという観点も踏まえて、ご指摘いただきました。

ご質問について、私からお答えいたします。山口先生か

らのご質問は、大きく分けると正史の主語をどうするのかということと、今まで書かれてきた年史をどう取り扱うのかということのご質問でした。政治史的な通史の書き方ということとで言及くださいました。先生がお読みいただいたとおり、我々の年史では主体を多元化する形でそれぞれの章、それぞれのところで主語を変えています。あるところでは「誰々学長が」、あるところでは「大木院長は」、あるいは「大木理事長が」と書いたりしているところもあり、いわゆる「政治史的」な書き方しております。われわれは、歴史書としようというふうに思っております。それで、その書きぶりとなりました。ちよつと真辺先生のご質問にも関わりますが、現代史、特に最近の歴史を書くのは非常に難しいという部分があります。生きている人の伝記を書くようなもので、あるいは生きている人が自伝を書くような、近くなれば近くなるほどそういう難しい側面が年史の叙述をする際にもありました。従つて、評価を書くよりも事実を書くというところで書いております。

また、史料引用では、たくさんさんの発言のうちの部分を引用すべきか、非常に迷つて、端的にしかも正確にという風に、さまざま議論しながら書いてきたところもあるわけです。それから『青山学院九十年史』のような今までの

年史をどう取り扱うということで、先ほど申し上げたとおり我々は歴史書を書くかと思っておりましたので、過去の年史も歴史書だということで、そこに付け足すことは付け足し、修正することは遠慮なく修正しようというふうに考えて書きました。

『青山学院大学五十年史』での神学科の部分と、新しい『青山学院一五〇年史』の目次が同じような構成になっているのは、結果的にそうなったのです。当初は学生運動の中に神学科の廃止問題も書く予定でしたので、『資料編』Ⅱはそのような体裁になっています、しかし『通史編』Ⅱの目次を検討する段階で、青山学院・青山学院大学にとって神学科廃科というのは非常に重要なものなので、学生運動とは別に節立てをしたほうがよいという意見交換や議論を経て、結果的にそうになりました。

小林・続きまして、真辺先生からご質問を頂いておりまして、真辺先生も広範囲にわたってわれわれの年史についてご評価いただきまして、早稲田大学の状況も詳しくご説明ただいて、大学史編纂の課題なども大変よく分かりました。それでは、佐藤さんにお答えいただければと思います。

佐藤・真辺先生のコメントに対する応答として、まず年史編纂に際しては、広報については特別に意識をしないで、歴史書として自由に書かせてもらいました。青山学院ミュージアムについても、歴史を展示するということ以外に、何か意見や制限が付いたことはなく、青山学院史研究所やミュージアム事務室の方で自由に準備させていただいたと思っています。関係者一同が、執筆中の『写真に見る青山学院一五〇年』や『青山学院一五〇年史』を基にして展示を作ろうという考え方で一致していましたので、そのおかげでミュージアムの常設展示の内容も、現代よりも過去の話が 많이 になりました。その分、今後の企画展・特別展では、現代に近いところも取り上げていきたいと思っています。

また、教育の話述べますと、青山学院大学では「青山学院大学の歴史」という講義を設けています。これは青山スタンダード科目という、いわゆる大学の教養科目のなかの、歴史理解関連科目という科目群のなかの一科目です。そもそも歴史を教えることが前提となっていますので、これも年史を踏まえて自由に教えることができています。ただ、真辺先生がおっしゃったことと重なると思うのですが、戦後については学部を増設などの機構の話と言います

か、何となく大学の広報をする感じになってしまっているので、戦前を中心に講義しています。現代の学校史をどう教えるかは、これからも試行錯誤していきたいと思います。

小林・ミュージアムについてのお話でちょっと付言しておきますと、私どもの方とはもともと当初の計画、二〇一四年の当初の計画から歴史資料館をつくらうという構想でした。その構想の段階でさまざまな大学博物館を見学に行った時に早稲田大学にもお邪魔しまして、早稲田大学歴史館は、非常に広報的、あるいは校友向けの展示が多いということを押見しまして、そういう側面をどのような形で入れるかどうかということを検討したということがあります。早稲田大学の歴史館にわれわれも学んでいます。また、先ほど感想はどうですかとのお質問もありましたが、今のところアンケートを集計している段階ですけども、在学生や校友あるいは在校生のご家族の方々のご感想も概して好評です。特に留学生からの感想では、青山学院の歴史を通じて日本の近現代史を理解することができたと言った趣旨のものもあり、とても良かったと思っています。今後いろいろなご意見を頂戴しながら、早稲田大学のような現在の学院の姿を紹介する広報的な側面をどうするかについて

でも考えていこうと思います。

小林・続きまして、小川原先生からこれは非常に重要な質問をたくさん頂きました。まず本多の生涯の目的、あるいは青山学院の教育への影響といった問題についてです。本多庸一につきましては、私も資料を見ておりまして、色々と考えております。本多自身の生涯の目的について、キリスト教信仰に目覚めた頃を回顧して、日露戦争の時にヨーロッパに行って何回も演説していますが、その記録の一つに「私の回心」という英語の演説があります。その史料や山鹿旗之進などの回顧を読んでいくと、本多がキリスト教の影響を受けたジェームス・バラという人は、日本国家のために祈る、日本国民のために祈る、あるいは、天皇のためにも熱誠の祈りをささげている、そういう宣教師の誠実な態度に引かれてキリスト教の信者となる人が多数現れたということがわかります。また、キリスト教的な道徳が日本を救う、今の日本はキリストによって救われる、キリストによって日本を救うために自分の身を命をささげるというような決意が本多にはあったように私には読み取れました。

したがって、将来の日本国家のために、日本を先進諸国

と同等の水準に高めるという目的が前提にありまして、それがキリスト教的なものによって達成されるという考えがあるのかなと考えています。それから、内村鑑三の本多評価で、Bishop Honda the Peacemakerという言葉がありました。本多は平和の人、調和する人、争いを収めようとする人とされているんですね。その頃の近代初頭の天皇を中心とする国家という状況と、キリスト教に対する受け入れ体制がまだ整っていない日本社会の状況の中で、どのように社会とキリスト教信仰を融和させていくかという努力を本多は重ねていくわけです。調和者としての本多という性格がやはり強くて、それがさまざまな面に反映している。外国人宣教師と日本の教師の間の争いがありますし、佐藤さんが元良の話をされたように、日本人教師の中で辞職せざるを得なくなる人もいました。

宣教師も本多のことは信用しています。メリマン・ハリスは「武士道の化身」として本多のことを評価しています。本多の武士道精神については、小川原先生のおっしゃるとおりの評価だと思います。

ただ、そうした本多的な意味での「武士道」とは何かというところに関わると思いますが、本多が考えたメソジスト監督教会の特徴は何かということからも敷衍できると

思います。小川原先生がご指摘された松島剛への書簡は、本多が青山学院から「Manを出さしめよ」ということを書いているものです。その内容はアメリカにおけるキリスト教各派のなかで、メソジスト監督教会の特徴が「至誠」と「質直」なので、メソジスト監督教会の学校である青山学院はそういう学生を輩出し、それが日本の将来のためになる、日本を救うことになるという認識を記しています。こうした本多の教育の方針は、品性の陶冶とか人格主義教育という形で青山学院に根付くというか、根付かせようとした。本多が考えている「武士道」もそうした「至誠」とか「質直」に特徴付けられるのではないかと私は考えています。また、それは教室での学びだけではなくて実践的な教育ということで育まれると考え、自分の感化事業に学生を関与させる、あるいはさまざまな社会事業に取り組むことを本多は勧めていたようです。そうしたキリスト教教育による人格教育は、ある程度達成されたと評価を受け、今日の青山学院の発展につながっていると考えられる、というかそうであつたらと思います。

それから、宣教師との対立という文部省訓令第一二号問題のところですけども、本多が実際これについてどのような立場だったのかは、はっきりとは分からないのです。商

議会において日本人商議員と外国人宣教師が対立したというのは、安藤太郎が日記に書いています。でも、本多はどちらの立場だったかを明快に表している資料は、私は目にできておりません。本多が日本人側に完全に立っているかどうかは、史料などもしご存じでしたら教えていただきたいと思うっております。いずれにしても、宣教師の強い意見に従うような形になります。それは、中島耕二先生の素晴らしいご研究を参考とさせていただいて、宣教師のさまざまな厳しい態度について年史にも書いております。キリスト教教育を外したら、宣教師が予算を取り消すかもしれないということはもちろん重要だったと思います。

それは、先ほど佐藤さんの話で、明治東京地震についてもう少し重要視すべきだという話がありましたけど、まさにこの時、明治二十七年の地震で青山学院は大きな被害を受けていて、これから復興するためには死活的に外国からの援助が必要でした。青山学院の当時の状況として、援助を求めざるを得ないという状況も大きかったのかなと思います。

また、戦時下における先ほどの事例についてなんですけど、これは日向さんから回答していただいていいですか。

日向…日向でございます。戦時下における苦難の象徴として、寄附行為の変更と。これは気賀健生先生がお書きになられている通り、これについては本当に複雑ないろんな伏線があるといえます。青山学院は、明治期以来、大学をつくりたいということで大学令の時にもチャレンジしていますし、戦時期にも大学をつくりたいという意向を有する人たちがいました。大学をつくりたいという推進派と大学じやなくて専門学校のままでもいいという対立、米山梅吉など三井系の人たちは大学じゃなくて専門学校でいいというふうに主張しています。あるいは宗教の教育に対する温度差、教員人事をめぐる学生運動というようにいくつもの対立する構造みたいなものが複雑に絡み合って、この寄附行為の変更というところに至っていると思っております。

あと、一九四三年に大規模な人事異動、大なたを振るうといえますか、笹森院長時代に大木先生らを学院から追い出すという話がありまして、このあたりについても年史のほうでは記述しておりますけれども、これは基本的に学院の公的な資料、「理事会記録」を中心に書いておりまして、年史にはちよつと書き込めなかったんですけれども、笹森順造院長の手元にある資料では自分は確かに人事を断行したということなんですけれども、実はその以前、前院長の

阿部義宗院長の時にそうした人事異動の話が出ており、それをやむを得ず自分は断行したと。その断行したことについては相手方にも伝えなかったですし、そのことについても学院内外には公表せずに自分の胸の中できどめたというふうに記しています。

笹森院長の人事異動については、主に処分された側から厳しい意見や評価があります。ただ、今回の年史では十分に書けなかったわけですが、阿部義宗院長の時代からを含めて青山学院における内紛といえますか、そういったところも含めて書き込んでいく必要があるんじゃないかと考えています。ただそれには学院の公的な資料だけでは難しいところで、笹森順造院長の個人資料もあるということ、われわれも一回調査に行っただけですが、さらに資料を調査する必要があると思います。そういったところに笹森院長の苦悩、あるいは戦時期の青山学院の歴史を考える手がかりがあるんじゃないかなと思って、引き続き調査を進めていきたいというふうに考えています。ちょっと答えにはならないんですけども、以上となります。

小林・笹森順造の資料について中村早苗さんが調査してくださったものを使ったり、東京大学大学院法学政治学研究

科附属近代日本法政史料センター原資料部の撮影資料を収集したりしておりますけれども、もう少しありそうだといいところがあります。また、この時期、日本社会の風潮として青山学院のようなアメリカとの関係が深く、そしてキリスト教主義の学校に対する風当たりが極めて厳しい状況でした。自由主義的な教員を排除しようという意見書が校友から出されたり、あるいは学校の存続も危ぶまれるような状況だと認識させるような、それがどの程度可能性があるのかはよく分からないのですけれども、そうした状況に対応しなければいけないとの認識は確かにありました。

今回は、そのなかでも資料的に裏付けられているところを書くことにいたしました。また紙幅の制約もありましたので、その辺でもバランスよく書くことにしました。

それから、最後のご質問で、比屋根安定の「基督教と日本文化」の話がありました。本多庸一自身も、先ほどの武士道の話にあつたように、キリスト教と日本社会の融和を試みた点で、連続性があるといえます。ただ、むしろ本多の場合は、日本のキリスト教的な道德化を目指していたのであつたように思います。キリスト教を日本に合うよう変えるというよりも、日本を変えるためにキリスト教があるという考えと言ったら良いでしょうか。日本が近代

国家として、近代社会として欧米列強に伍するためにはキリスト教が必要だという立場だったのではないかと思います。その辺についてはまた考えて研究していきたいと思ひます。

最後のこれまでの語りからの脱却を目指したのかっていうお話でしたけど、目指したわけではありませんが、これまでの語りをしようと思ったわけでもありません。資料に基づいて歴史書として青山学院の戦前戦後を書くの一つのこういう像になったというところで書いています。

小林…フロアからのご質問があります。私からコメントした部分でもあるんですけど、本多がメソジスト監督教会について、他の宗派とは異なると捉えていたと、最初の松島の手紙の中でも言及しています。それでは、そもそもメソジスト監督教会は歴史的にどういう教会なのかについて、シュー土戸ポール先生からご説明いただけるとありがたいと思ひます。

シュー土戸…メソジスト監督教会はプロテスタントの一派で、もともと聖公会、英国国教会から発展したものでした。しかし、英国国教会は割とハイチャーチの英国のエリ

ートの人々を対象とするものでした。そこで、メソジストが始まった当初からジョン・ウェスレーをはじめとして、かなり労働者、農民などを対象とするような運動が引き起こされまして、そして当初から教育を非常に強調していました。メソジスト運動はキリスト教の宗教運動だけではなくて、社会改革運動というふうにもいわれています。社会貢献活動、現代でいえばボランティア活動ですね。より良い社会に変えるための活動が活発で、世界中に多くの学校を設立することとなりました。最初は英国、その次はアメリカ、そして日本にも設けられました。ですので、一九世紀に日本に來た宣教師の活動の中では、まず学校を設立することが非常に重要視され、日本では二〇校以上の学校が設立されました。メソジストは特に青山学院の歴史の中では、より良い社会に変えるための禁酒運動や、女性の立場を上げるための女性教育といった活動にも、かなり力を入れるような教派でもありました。私は、これだけで九〇分ぐらいの講義ができるのですが、ここまでで省略いたします。

小林…ありがとうございます。あとフロアから和寺悠佳先生にご質問を頂いておりますので、ちょっとご発言いた

いいですか。

和寺・青山学院大学宗教主任の和寺悠佳と申します。メソジストという話が出ましたが、それと関連した質問をさせていただきます。メソジストという教派教団は、現在の日本においては日本基督教団という合同教会の中に合流しています。メソジストという特定の教派教団の宣教師によって青山学院が設立されて、戦前の一九四一年まで歩みを進めてきた。その後はメソジスト教団ではなく、日本基督教団と特に関わりの深い学校として歩んでいる。このキリスト教を巡る状況の変化に対して、青山学院がどういう影響を受けたか、あるいはその逆に、青山学院から日本のキリスト教史に対してどのような影響を与えたのかも重要だと感じました。例えば、阿部義宗が日本基督教団の初代総会議長になったというのは非常に興味深い事象です。メソジストの宣教師との関わりについては相当論じられてきていますが、日本基督教団の設立以降の日本のキリスト教史と青山学院との関わりを掘っていくこともまた、青山学院史が現代の、特に思想史や宗教史に対して貢献できることがあるのではないかなと思います。質問でありコメントであり感想でありというような内容ですけれども、そのあた

りについて現時点でお考えになるところがあればお聞きたく存じます。以上です。

小林・ありがとうございます。小川原先生、ご専門のところとしますので、いかがでしょうか。

小川原・貴重なお話をありがとうございました。日本基督教団の設立プロセスに関してはご承知の通り、文部省宗教局がかなり主導しており、同時に仏教教団の合同を進めていますので、やはり戦争動員という色彩が強かったのだと思います。ただ、その辺のプロセスに関しては現状恐らく当事者、文部省宗教局に勤務していた人の回想ぐらいしか史料がなくて、宗教局内の史料はまだ開示されていないので分からないというのが実態ではないかと思っています。もちろん富田満など首脳部に関する研究はありますけれども、かなり限界があるので、その辺は情報開示請求も含めて今後より行政側の史料が出てくると、プロセスがメソジストを含めてよく分かってくるのではないかと思います。すいません。このあたりで。

小林・ありがとうございます。われわれの年史でもこの部

分は事実の確認という記述にとどめています。ただ、日本基督教団に積極的というか、青山学院が入るというところがありますし、さまざまな教派が対立することに対して批判的であつたのは本多院長もそうでした。今おっしゃられたようなことを踏まえて、これから研究を進めていきたいと思います。

おわりに

以上、シンポジウムの概要を記した。活発な質疑応答を得て、充実したものとなった。また、ご参加くださった方々から『青山学院一五〇年史』が大変好意的に評価されたことは、感謝に堪えない。今後も、シンポジウムの成果を踏まえて、青山学院の歴史研究を進め、日本近代史研究の発展に貢献して参りたいと思う。またそうした研究を青山学院ミュージアムの展示に活かし、その充実に努めていきたいと思う。

コメンテーターの先生方、当日ご参加の方々に篤く御礼申し上げます。